

85 誌上発表 ポンペにヤママユの蚕種を調達した 医学生について

須長 泰一

伊勢崎市

幕末期、長崎で西洋医学教育を実施していたオランダ海軍軍医ポンペは、その帰国に際して、越前に由来する肥後産のヤママユの蚕種を極秘に入手し、それを持ち出すことに成功している。これは微粒子病による影響から、国内の養蚕業が壊滅的な状況に陥っていたフランス政府の極東駐在農業担当官を務めていたウジェヌ・シモンの依頼を受けたものであったが、文久二年(1862)十月、実際に肥後に出向いて、ヤママユの蚕種を調達し、それを手渡したのが、ポンペの下に学ぶ若い医学生であったことを会員として所属するフランスの帝国動植物環境馴化協会会報(1863)の中で報告している。その当時、ヤママユの蚕種を国外へ持ち出すことは国禁を犯す行為であり、当然、こうした事実が発覚すれば、シーボルト事件のような深刻な事態に至ることが推測されたことから、関係者が重罪に問われる可能性を危惧し、その名前については決して口外しないと記述している。さらに、困難な任務にもかかわらず、それを献身的に完遂した勇氣ある門下生に対して、報告は感謝の気持ちが深く滲み出る文章で綴られている。突然の依頼から僅か二週間でヤママユの蚕種を確保して、長崎に戻ってきたという事実から、この門下生は現地の事情に通じた肥後出身者である可能性が高いことを推測させた。ポンペに師事した生徒には、松本良順を介して入門した人物と個人的に入門した人物が存在することが知られているが、松本良順を介して入門した生徒については「登録人名小記」で把握することが可能で、その中に肥後出身者である高橋春圃、内藤泰吉、野中宗育らが含まれていることが確認できた。

高橋春圃(1805~1868)は阿蘇郡山西布田日向村に生まれ、熊本藩医を務めた人物である。初め漢方医学を修めたが、天保五年(1834)、熊本を訪れたシーボルト門下生の日野鼎哉に影響を受け、西洋医学を学ぶために鼎哉に随行して長崎へ向かった。さらに、嘉永二年(1849)、長崎へ赴き、モーニッケから種痘法を学び、熊本で初めて種痘を行った。文久元年(1861)、再度、長崎へ赴き、ポンペに就学した。明治元年(1868)、死去。

内藤泰吉(1828~1911)は玉名郡南関郷吉地村に生まれた人物。内藤家は代々医を業とする家系であり、天保十四年(1843)、熊本で漢方医富田宗栗に就学した。その後、家業の手伝いをしていたが、弘化四年(1847)、横井小楠の門弟の長野藩平が南関郷で塾を開いたことから、その指導を受けた。嘉永元年(1848)、竹崎律次郎の紹介で横井小楠の塾に入門。嘉永五年(1852)、小楠の指示により、小楠塾に寄宿しながら、寺倉秋提に就いて、西洋医学の学習を開始した。文久元年(1861)、長崎に赴き、ポンペに就学。文久二年(1862)、福井に赴く横井小楠に随行するため、長崎を離れる。その後、外様御医師御雇となり二条城に詰めた。任期終了後帰郷。慶応元年(1865)、再び、長崎へ赴き、ボードインに就学。維新後には、熊本藩軍医を務め、東北地方を転戦した。その後、古城医学学校の設立と運営に関与し、通町病院の治療主任を務めた後、開業した。『日本医籍』に熊本区塩屋町裏二番町開業とある。明治四十四年(1911)、死去。

野中宗育(生没年不詳)は、横井小楠の弟子で、内藤と同じく、嘉永五年(1852)、小楠の指示により、小楠塾に寄宿しながら、寺倉秋提に就き、西洋医学の学習を開始した。ポンペに就学したことも、恐らく内藤と同様、小楠の指示によるものと考えられる。その後の活動については不明であり、『日本医籍』に玉名郡関村で開業していたことが確認できる。

この三人で、高橋春圃は高齢である点から報告内容と合致せず、内藤泰吉も福井へ赴く横井小楠に随行するため、長崎を去っていたという事実から、ポンペにヤママユの蚕種を調達した門下生には該当しないことが明らかであり、野中宗育のみ可能性のある人物として浮上するが、現段階ではそれを確定する資料が把握されておらず、今後の課題となる。